

博士学位論文審査要旨

2018年1月17日

論文題目： トルコは如何にしてムスリム・ディアスポラを受け入れたか
—ウイグル亡命者の軌跡をたどる—

学位申請者： 中屋 昌子

審査委員：

| | | |
|-----|--------------------|-------|
| 主査： | グローバル・スタディーズ研究科 教授 | 内藤 正典 |
| 副査： | グローバル・スタディーズ研究科 教授 | 加藤 千洋 |
| 副査： | グローバル・スタディーズ研究科 教授 | 中西 久枝 |

要 旨：

本論文は、中国の新疆ウイグル自治区からトルコに渡ったウイグルが、ディアスポラ・ムスリムとして覚醒を経験し、トルコの社会に受け入れられていく過程を実証的に分析した研究の成果である。改革開放の後、新疆においてもイスラーム復興の動きが活発化したことに対して、中国政府は規制を強め、2009年の7月5日にはウルムチ市においてウイグルが蜂起し中国当局と衝突するに至った。この事件にあたってイスラーム世界諸国のなかで強い懸念とウイグルムスリムに対する連帯の意思を示したのがトルコであった。その結果、ウイグル人のトルコへの亡命が増加したのだが、ディアスポラ・コミュニティにおいては、次第にウイグルというエスニシティを軸とする連帯よりもムスリムとしてのアイデンティティを強調する方向に傾斜していく。中国政府にとって、ディアスポラとなったウイグルは過激主義者（宗教極端分子）だが、ウイグルの間では預言者ムハンマドがマッカからマディーナに移住した（聖遷、ヒジュラ）を行ったムハージーンとして高く評価されたことが、その背景にあるという指摘は本論文の核心となっている。

中屋氏は、ムスリムとしてのアイデンティティを（1）サラフィー的志向をもって新疆を脱出した人々、（2）ウイグル民族主義者であったがトルコに渡った後にサラフィーを志向するに至った人々、（3）新疆での伝統的信仰としてのスーフィーであることを保持してきた人々という三類型に分け、自身による綿密な聞き取り調査を基に、いかにしてムスリムとしての覚醒を経験していったのか、明らかにした。中国という宗教と親和性の低い国家におけるムスリムが覚醒していく過程に焦点を当てた研究は少なく、今日、世界的潮流であるムスリムの覚醒とサラフィー主義との関係を解明したこと、さらにディアスポラを受け入れるトルコのムスリム社会との相互関係に焦点を当てた点は特筆に値する。

全体は8章から成る。序章では、亡命ウイグルにかかわる本研究を、ディアスポラ論を軸として展開するための先行研究のレビューを行い、研究の目的と方法を示した。第1章では新疆が中国共産党政権に組み込まれてから文化大革命期を経て改革開放に至る宗教政策を概観し、イスラーム社会の社会主義体制への包摂と厳しい規制の実態を詳述した。第2章では中国共産党の宗教統制政策が新疆でいかに実践され、ウイグル側がそれにいかに応答したのかを聞き取り調査を基に明らかにしている。第3章では世俗的な教育を受けたにもかかわらず、サラフィーを志向しトルコに逃れた人物の詳細を描いている。続く第4章では、ウイグル民族主義からサラフィーに転向した人物の証言を基に、民族主義それ自体が人為的に造られたものであり、ムスリムとしての覚醒を経るに至って後退していく過程が極めて具体的に示されている。さらに、第5章ではナク

シュバンディー教団のスーフィーとしての伝統を維持しつつ、サウジアラビアでサラフィー主義に接するもなじめず、さらにドイツでムスリム同胞団系の組織に接近するも、その運動に身を置くことをせずイスタンブールでスーフィーとして生き続ける信徒の姿を精密な聞き取りから明らかにしている。第6章では、イスタンブールの社会がウイグル・ディアスポラの人びとをいかに受容したかをトルコにおけるイスラーム系 NGO 組織や個人による具体的な支援活動を基に解き明かした。終章では、トルコ側の社会も、1990年代までは強い民族意識によってウイグルを同じテュルク（トルコ系民族）とみて連帯意識を抱いていたのに対し、2002年の公正・発展党政権成立後、次第に、同じトルコ系という民族意識が後退し、困難から逃れたムスリム同胞として受容する方向に変容したことを明らかにしている。

本論文の価値は、単にウイグル・ディアスポラの側からのムスリムとしての覚醒過程を明らかにしたことだけでなく、受容するトルコ社会も同様に強固な民族意識からムスリム同胞意識への転換が起きていたこと、いわば両者が共鳴しあっていたことを克明に明らかにした点にある。

最終試験では、両者の相互作用に関しては整理がやや不十分であること、トルコと中国との外交上の関係についての言及が少ない点などが指摘された。しかしながら、これらの点については将来の研究に期待できることであり、ウイグル・ディアスポラの証言を直接聞き取るという困難に挑戦した中屋氏の業績を損なうものではなく、イスラーム社会研究にとって新たな地平を拓くものと高く評価された。

よって審査員一同は、本論文が博士（グローバル社会研究）の学位を授与するものにふさわしいものであると認める。

総合試験結果の要旨

2018年1月17日

論文題目： トルコは如何にしてムスリム・ディアスポラを受け入れたか
—ウイグル亡命者の軌跡をたどる—

学位申請者： 中屋 昌子

審査委員：

| | | | | |
|-----|-----------------|----|----|----|
| 主査： | グローバル・スタディーズ研究科 | 教授 | 内藤 | 正典 |
| 副査： | グローバル・スタディーズ研究科 | 教授 | 加藤 | 千洋 |
| 副査： | グローバル・スタディーズ研究科 | 教授 | 中西 | 久枝 |

要 旨：

中屋昌子氏に対する総合試験は、2018年1月16日(16時40分～18時20分)に実施された。論文の内容および現代中国研究、現代トルコ研究、現代イスラーム社会研究など様々な角度から試問が行われ、中屋氏はこれらに対し逐一的確に答えた。

本論文は中国語、ウイグル語、トルコ語文献を渉猟しつつ執筆されており、研究に必要ないずれの外国語能力も十分と判断された。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： トルコは如何にしてムスリム・ディアスポラを受け入れたか
—ウイグル亡命者の軌跡をたどる—

氏名： 中屋 昌子

要旨：

アジアとヨーロッパが交差するトルコ最大の都市イスタンブルは、中国から移り住んだ多くのウイグルが暮らす街である。そのイスタンブルに、改革開放後、宗教の自由を求めて亡命してくるウイグルが後をたたない。敬虔なムスリムであるがゆえに、祖国からの離散を余儀なくされた人たちが目指すトルコは、ウイグルのもうひとつの「故郷」として求心力を高めている。新疆ウイグル自治区(以下、新疆)で高まったイスラム復興が、ウイグルの新疆からの離散を通じて、トルコのウイグル社会にまで達しているのである。そして、それは、トルコのイスラム復興とも連動することによって、ウイグルの宗教的なディアスポラ・コミュニティを形成し拡大させている。そのコミュニティはウイグルをはじめ、トルコ人やトルコの関係諸機関のネットワークに支えられ、重層的な広がりを見せている。

ウイグルのイスラム復興に関する先行研究は、その多くが地理的空間としての新疆の範囲内に対象を限定したものである。そして、イスラム復興を管理・統制しようとする中国の宗教政策を通史的に扱ったものが主流である。国境を越えた枠組でのイスラム復興の研究は一部では行われているものの、サウディアラビアなどの外国から新疆へ流入して来るものを捉えた分析に留まっている。一方、ウイグル・ディアスポラを対象とした研究は、テュルク民族主義者として知られる歴史上の人物や、世俗的な観点から世界ウイグル会議とそれに連なるウイグル・ディアスポラの民族主義系 NGO 組織の活動に焦点を当てたものが主流となっている。新疆から離散し、トルコに信仰の自由を求め亡命するウイグル・ディアスポラの急増が社会現象となっているにもかかわらず、こうした現象に焦点を当てた研究は、ウイグルのイスラム復興研究、ディアスポラ研究の双方において空白領域となっている。

本研究が進めるウイグルの宗教的なディアスポラ研究は、単に移動に焦点を当てた移民の概念や、出稼ぎのために移動する人々の概念に収まるものではない。ウイグルの離散は自発的なものではなく、故郷を離れざるを得なかったトラウマを伴った離散であることに焦点をあてている。このような対象には、人そのものに焦点を当てるディアスポラの枠組による分析が有効である。

本研究の目的は、トルコのウイグル・ディアスポラのうち、主に改革開放後に新疆から離散を余儀なくされたウイグルの宗教的なディアスポラに焦点を当て、①ウイグルの離散に至った経緯と背景、②離散の形態、③離散先トルコにおける信仰形態の特徴について明らかにすることである。トルコのウイグル・ディアスポラのイスラム信仰の形態が一様なものではないことを踏まえ、本研究では、ウイグルのイスラム信仰の形態を主に①イスラムの教義を厳格に実践するサラフィーと②ウイグル民族主義者からトルコでイスラムに覚醒したサラフィー、③ウイグルの伝統的イスラムであるスーフィー(神秘主義者)の計3つの信仰形態に分類し、それぞれ対象者に聞き取り調査を行って、トルコにおけるウイグルの宗教的ディアスポラの信仰形態を構造的に把握した。そして、トルコにおけるウイグルの宗教的ディアスポラのコミュニティについて、NGO(世界被抑圧者と難民協会)の活動の実態調査をとおして明らかにした。

各章の内容は以下のとおりである。

第1章では、ウイグルの故郷である新疆が中国共産党政権に組み込まれてから改革開放に至る

までの宗教統制に関する歴史的経緯を明らかにした。中国建国初期(1949年から1957年)は、中国共産党が現地ムスリムに対して宥和政策をとっていたこと、しかし社会主義化の動きが急進的になると(1958年から1965年)、ワクフ制度の解体やマドラサ(神学校)の閉鎖などが進められ、イスラムを支柱とした社会が次第に解体されていったこと、文化大革命から改革開放(1966年から1978年)までは、法的に信仰が禁止されていたわけではないが、文化大革命自体が超法規的なイデオロギー闘争であったために、信仰そのものが激しい糾弾の対象となったことなどについて確認した。同時に、その過酷な状況のもとでウイグルが地下活動によって信仰実践を続けていたことを明らかにした。

第2章では、新疆のイスラム復興と宗教統制の現状について明らかにした。すなわち、改革開放以降、信仰の自由が認められ、イスラム復興が進んだが、その一方で、女性のニカーブ規制や子どもの宗教活動禁止など厳格な宗教統制が進んでいることを指摘した。そうした宗教統制は法を根拠にしたものであることを指摘し、その背景には信仰の自由は認めつつも宗教を消滅させるために働きかけを行うというマルクス主義の宗教理論が存在することを明らかにした。それによって、新疆の宗教統制とイスラム復興の構造的特質を明らかにした。

第3章から第5章では、サラフィーと元民族主義者のサラフィー、そしてスーフィーのそれぞれについて、具体的な人物の経験をもとに、離散の経緯と背景、離散の形態を探った。

まず、第3章では、サラフィーに焦点を当てた。そして、中国で信仰とともに生活をいとむことが困難であったことや、2009年7月5日ウルムチ事件の前後にウイグルとしてもムスリムとしても過酷な状況にさらされたことで、新疆から離散しトルコに亡命する決意に至ったことを明らかにした。2009年7月5日ウルムチ事件以降、信仰の自由を求めてトルコに亡命する人たちの急増が社会現象となっているが、同事件が発生した際にトルコ政府がウイグルに同情を示したことが背景にあることを指摘した。そして、前述のサラフィーがパスポートを所持せずに東南アジアを経てトルコに亡命した経路や当時の状況について聞き取り調査をもとに検証した。

第4章では、もともと新疆では民族主義者であったが、トルコでイスラム覚醒しサラフィーとなったウイグルに焦点を当てた。トルコに亡命後、トルコやウイグルの民族主義者との交流によって民族主義に失望し、次第にイスラムに傾倒していったことを明らかにした。また、現在行っている亡命ウイグルへの支援活動を始めることになった背景には、トルコへの亡命途中で家族と生き別れとなったウイグルたちから支援の要望があったこと、そしてその支援の協力者に宗教的関係者であるトルコ人の存在があったことについて明らかにした。

第5章では、伝統的スーフィーを保持し続けているウイグルに焦点を当てた。改革開放前の新疆では、ムスリム社会の解体によって信仰の実践を自粛せざるを得なくなっていたことや、信仰の自由を求めて改革開放直後に新疆を離れた経緯、亡命先のトルコに定住するまで流浪したサウディアラビアやヨルダンなどでの宗教実践について聞き取り調査を行い、スーフィー特有の信仰体系と思考について考察した。

第6章では、第4章で示したウイグルへの支援活動のために設立したNGO(世界被抑圧者と難民協会)に焦点を当て、協会設立に至った経緯を明らかにしたあと、協会が行っているウイグルへの身分保障や教育支援、医療支援の請願、そしてトルコ赤新月社をはじめとするトルコ諸機関からの援助、およびウイグル商人、トルコ商人からの支援の詳細について明らかにした。こうした支援によってウイグル・ディアスポラの宗教的なコミュニティが形成され、拡大していることを指摘した。そして、そのもとでウイグルやトルコ人がテュルク民族としてよりも、むしろ互いにムスリムとしてのシンパシーを有していることを明らかにした。

トルコにおけるウイグルの宗教的なディアスポラは、トルコにおけるイスラム復興と連動し、イスラム共同体の一員として受け入れられている。本研究では、こうしたイスラム共同体のなかでは、イスラム教義体系に内包されている慈善活動が自ずと運用され活発化し始めることを明らかにした。ムスリムの自発的な慈善行為によるものであるから、慈善活動はより活発化し、ムス

リム同士の関係は強固なものになっている。それがイスラム共同体における共存の原理となっていることを確認した。結局のところ、テュルクやウイグルという民族の概念は人為的に作られたものであって、それが社会の公正をもたらす、もしくは共存のネットワークを創出するということには、つながらない。それゆえ、ムスリムとしてのつながりを強固なものにしているのである。それは、まさにウイグルがムスリムとして新疆で創出したかったムスリム共同体なのであったということを示した。

本論文では、このようにトルコにおけるウイグル・ディアスポラを主にウイグル側からの視点から検討した。今後は、受け入れ国であるトルコやトルコ人の視点、特に離散した人々を受け入れる文化的・経済的環境について具体的に考察するために、トルコのムスリム商人を主体としたイスラム復興について別途詳しく検討する必要がある。また、ウイグルの宗教的なディアスポラについての比較検討をするために、トルコに亡命した同じテュルク民族、すなわち冷戦崩壊後に急増した中央アジアのテュルク系ムスリムのディアスポラの実証研究を進めていくことが必要となる。